

医療者による親をがんで亡くした子どもへのサポートプログラム

○井上 実穂 1) 2) 大沢 かおり 2) 3) 樋口 由起子 2) 6) 小林 真理子 2) 4) 白石 恵子 2) 7) 赤川 祐子 2) 5) 木原 歩美 2) 8)

1) 四国がんセンター 2) NPO法人Hope Tree 3) 東京共済病院 4) 聖心女子大学 5) 秋田大学 6) 明治安田総合研究所 7) 九州がんセンター 8) あすかい病院



【目的】 現在、日本では親をがんで亡くした子どもに対して、医療職が行うプログラムは実施されていない。今回、親をがんで亡くした子どもへのサポートプログラムをがん医療に関わる専門職が開催したので報告する。(なお、本プログラムは、2024年度東急子ども応援プログラム、明治安田総合研究所の助成を受けて実施した)

【開催日】 ①2024年10月 ②2025年3月 の2回 13:00~16:00

【参加者】 9家族、子ども12人(6歳から13歳)

8家族が父親、1家族が母親と死別

1回目 2024年10月27日(日) 6家族、子ども8名

2回目 2025年 3月22日(土) 3家族、子ども4名

【広報】 NPOホームページ、チラシなど

【運営スタッフ】 医療ソーシャルワーカー、公認心理師、医師

【内容】 1 死を理解する 2 悲嘆に対処する 3 思い出を大切にす 4 生きていくの要素を取り入れたアクティビティを実施(Good Grieving Program2013)。保護者グループを別に用意



リラックスの方法を学ぶ
Five things finger breathe



悲しみについて理解する



バランスをとろう
Sun and Cloud Mobile



保護者語り合い



思い出の箱づくり



蝶々のSuncatcher



絵本読み聞かせ



みんなでケーキ

【考察】 同じ立場の子どもと一緒に悲嘆について学び、目的を持ったアクティビティを実施することは、死についての理解が進み、連帯感、達成感が得られるものであった。保護者にとってもがんの闘病経過を共有しやすく、参加者同士の相互理解が進み、心理的苦痛が軽減されたと思われる。

専門知識を有する医療職による運営は、参加者にとって心理的安全性が保証されるものである一方で、広報、資金面、スタッフなどが課題として挙げられる。今後はプログラムが継続して運営するために人材育成や広報、資金面など多方面からの協力を得ることが求められる。

*本発表に際し、COIはありません